インタグコーヒー生産者協会、通称ＡＡＣＲＩ（アークリ）が設立されたのは、１９９８年のことでした。１９９０年代初頭から始まった鉱山開発プロジェクトに対するオルタナティブな収入源として、森と共存する森林農法の有機コーヒー生産をすることになったのです。

それまではトウモロコシやサトウキビ、豆などを作り、仲介業者に低い価格で買い叩かれるということが一般的な僻地でした。アークリ会長のフランクリン・ヴァカさんは、それでも売れるならばまだよかったと、昔、数本植えていたコーヒーの実りがよかったとき、コーヒーを担いで山道（ほぼ獣道）を下り、持っていったところ、豆が湿りすぎているので買えないと突き返されたことを話してくれました。広大な山々の原生林、そしてその麓に住む人々の生活は、一見すると自給自足でのんびり豊かに見えますが、一方で厳しい貧困に苛まれていました。

当時、インタグにおけるコーヒー生産は、各々自分のところで飲む分を細々と育てていた程度。コーヒーは植えた後は放置され、虫食い豆や欠けた豆が混在していました。アークリの設立当初は大変だったことは想像に難くありません。僻地の農家の人たちが、知識もなく、当時はまだ電気も電話もなく、読み書きができるのも一部の人のみという環境で、一体どうやって協会を形にしていったのだろうかと、人々の努力を思うとため息が出るばかりです。

AACRI

エクアドル

設立から23年。森でコーヒーを作り続けてきたインタグコーヒー生産者協会のこれまでと、これから

アークリ生産者のラミロ・ヴァカさん

16年間技術指導に関わっている
ジョアンナ・カルセレンさん

アークリ会長のフランクリン・ヴァカさん

最初の頃はエクアドル全国生産者組合（ＣＯＲＥＣＡＦ）の技術指導を受けていました。生産者の方々に有機農業、日陰栽培、肥料作り、病気や害虫の対策、収穫方法、収穫後の扱いの指導をしていくと同時に、地域の技術指導員を育てるためでした。

技術を学んだ技術指導員は、山を隔て点在している農家の方々を悪路・悪天候のなか訪問し、彼らにもわかる言葉で何度も丁寧に説明していきました。「何より品質改善の重要性を理解してもらうことが本当に大変だった」と、この１６年間技術指導に関わっているジョアンナ・カルセレンさんは話してくれました。

納品の際の品質管理を担っているフランクリン・モンテネグロさんは、「生産者が持ってくるコーヒーの水分量は、最初の頃はマチェテと呼ばれる山刀で床に置いたコーヒー豆をパーンと割り、その跳ね方で水分量をみていた」と振り返ります。

コーヒーを初めて日本に輸出するときも、どのような状態で送るのか、どんな手続きが必要なのか分からない。他のところを視察しに行き、何十トンも山と積まれたコーヒーを前に呆然と立ち尽くしたこともあったそうです。そんなこんなも今は笑い話になっていますが、「当時は笑い話どころか、涙が出そうなくらい不安だった」と、当時まだアークリに加わったばかりだったフランクリン・ヴァカさんは言います。

あれから２０年以上たち、インタグ地方におけるインフラもある程度整い、移動やコミュニケーション手段が以前と比べると格段によくなりました。栽培技術が少しずつ生産者のみなさんに浸透し、生産者側の栽培、豆の選別や管理、乾燥技術が改善され、アークリにも水分計や、豆のサイズ分別や密度を測る機械が導入され、コーヒーの品質は飛躍的に向上しました。焙煎技術も取得し、生豆だけでなく、付加価値のある焙煎コーヒーも、営業努力によって国内外の市場に少しずつ広がっていきました。

その一方で、別の問題も出てきました。様々な理由から会員数や生産量が下がってきてしまっているのです。生産者たちの収入が上がることによって、彼らの願いであった子どもたちの教育機会が広がり、町に出て、高等教育を受け、そのまま町に留まることが多くなりました。そのため、農園を受け継ぐ若い世代がいなくなり、生産者の高齢化が問題となってきました。また気候変動による異常気象で以前はなかったコーヒーさび病が蔓延し、これまでの病害の対応法では効かなくなり、コーヒー栽培をやめてしまった生産者も出てきました。

さらに昨年からのコロナウィルスによって、エクアドルで非常事態宣言が発令され、インタグ内のバスの運行がすべて停止されたため、スタッフの出勤・生産者訪問が困難になりました。アークリだけの問題ではありませんが、国内の、特に観光地のカフェやレストランでの売り上げが九割減。アークリには有機認証がある生産者、また有機栽培はしているものの、認証未取得の生産者がいます。海外からの有機認証付きのコーヒーによる収入は、有機認証を取得している生産者への支払いに使われますが、未取得の生産者への支払いは、国内市場の収入に頼っているので、売り上げが減少したことで、生産者への支払いが滞り、アークリ離れが起こりました。スタッフの出勤日数を減らすことで、人件費を少しずつ削り、生産者への支払いに充てているという状態です。

収穫されたコーヒーの実

そんな中、アークリが力を入れて取り組んでいるのが、現在のコーヒー栽培を再評価し、生産量が落ちてきたコーヒーの樹木のレセパ（古くなったコーヒーの木を深く剪定し、木を若返らせる方法）、および新規苗木の植樹を積極的に行うことです。各生産者が３００本のレセパおよび植樹をすることが決められ、苗木とアークリで作った肥料とセットにしたキットを生産者に配布しました。そうすることで、数年後のコーヒー生産量の増加を目指しています。

あと、特に力を入れてきたのは、女性支援です。農村ではやはり男尊女卑の風潮が未だ根強く、女性たちは男性の影に隠れて、教育や雇用機会は平等に与えられていません。コーヒー栽培における女性の役割は大きいにも関わらずほとんどの土地の名義は男性となっています。そんな女性たちにスポットを当てて、インタグで女性たちが幸せに暮らせることを願って女性生産者だけで作るコーヒーのブランドを作りました。

今年の3月27日、コロナウィルスの影響で、ずっと開かれなかったアークリの総会が開かれました。４年間の会長任期が前年に切れていたフランクリンさんは、次の会長さん、マルセロ・ヴェルガーラさんにそのバトンを渡しました。マルセロさんは、アークリ設立当時のメンバーだった故ダニエル・ヴェルガーラさんの息子さんで、いったん町に出ましたが、インタグに戻ってきて、反鉱山開発運動に関わりながらコーヒー生産に取り組まれています。またアークリの新しいページが始まります。

（ウインドファームエクアドル駐在スタッフ　和田彩子）